コレンテ　vol. 41　n.355　giugno　2020

CORRENTE

Centro Culturale Italo-Giapponese

＊イタリア食文化紀行＊

～シエナ編②～

岡本　勇志

穏やかな朝。目が覚めるとまだ、8 時頃だった。一昨日までいたナポリの朝とは全然違う。ナポリの朝は喧騒で目が覚めるが、シエナの朝はなんとも穏やか。私が 1 年いたウンブリア州のトーディに似ていた。

【シエナのドゥオーモ】

さて。今日はどこに行こうか。まずはなにをさておきドゥオーモに行こう。それから、昼食のレストランを探索しようか。そんなことを考えながら、とりあえずドゥオーモに行くため支度をすましてホテルをでた。

ホテルから中心地まで歩いて 15 分ほどあった。ふらふらと朝のシエナを歩いていると、バールを発見。やはりどの街でもイタリアの朝はバールから始まる。バールに入り、カプチーノとコルネットを注文。少し無愛想なおばさんが作ってくれた。どんなに店員が無愛想でも、これを飲むとホッとする。

さて、バールをでてブラブラ歩いていると小さな広場に着いた。シエナもウンブリアの町と似ていて街が丘の上にあるため、広場から綺麗なパノラマが見える。ベンチに、おそらく毎朝おきまりの場所に座っているであろう老人がいた。私もベンチに腰掛け何も考えず風景を眺める。綺麗というよりは広大で清々しい気持ちになった。深く深呼吸なんかしてみて、また歩き出した。

さて、ドゥオーモに着いた。

ドゥオーモをみた瞬間、おもわず『すげー』と呟いてしまった。それくらい立派で決して気取らず凛とした姿だった。私の中でドゥオーモには個性があり、その個性がその街を象徴しているように思う。あくまでこれは、個人的な感想であるが。

例えば、ナポリのドゥオーモは大きくどこかギラついている。ミラノは立派で大きくどこか取り繕っている。私が住んでいたトーディは決して大きくなく素朴だが優しい。また同じウンブリアでもオルヴィエートは大きくミラノや大都市にも負けない威厳を持っているが、どこか田舎の優しさと穏やかさがある。これは完全に私の感じかたではあるが、それを大切にしている。

その中でシエナのドゥオーモは自分の中で特別な感じがした。大きく威厳があり立派。でも、どこか素朴で決して派手ではない落ち着いた感じがした。

あまりの迫力に圧倒されながら入口へ。まだ朝だというのに、入り口には列ができていた。様子を伺うと、入館するのには、別館でチケットを購入する必要があるらしい。チケットショップに行き、ドゥオーモの入館とドゥオーモの屋上まで見学できるチケットを買い、列に並んだ。

イタリアのどの街にも深い歴史と文化がある。その一つが建築と美術と言えるだろう。その美術と建築好きがまず見るのが、教会や聖堂である。

その建築様式や中に描かれている画法で、作成された時代などが分かり、その歴史がわかるという。

私の今回の旅は『食』をテーマにしていたために、あまり建築や美術のことはわからないが、それでもこのドゥオーモが素晴らしい建築であることはわかった。全て、白と黒の大理石で造られ美しいゼブラカラーだった。もう少し美術を勉強しておいたならと少し後悔もした。

いよいよ中に入った。まず驚いたのは床にモザイク画が一面あったことである。壁画や天井画を見たことはあっても、床に描いてあるのは初めて見た。そして、館内の壁や柱も白黒で構成されていた。いたるところに絵や彫刻があり、圧倒された。どこの教会や聖堂の中には必ず彫刻や絵はあるのだが、このシエナのドゥオーモは何か違う感じがした。

そして何より、驚いたのがステンドグラスの最後の晩餐。外からドゥオーモを見ると教会の中央上部の大きな丸い窓にようになっている部分が、中から見るとキリスト最後の晩餐のステンドグラスになっている。なんとも美しいの一言だった。

館内を圧倒されながら見学し、ドゥオーモの中から屋上まで回ることのできるツアーに参加した。このツアーはチケットを購入するときにプラス料金でつけることができ、せっかくだからと参加した。階段でどんどんとドゥオーモの上へと上がっていき、下を見るとたくさんの人がいるのが小さく見えるほど上まで上がることができた。

この途中に、係りの人がドゥオーモの歴史や成り立ちを教えてくれる。このツアーに一人で参加していたのは私一人だったため、係りの人が話しかけてくれた。が、おそらく私をアジア系のバックパッカーとでも勘違いしたのか、英語で話しかけてきた。とっさに『Mi scusi, io non posso parlare l'inglese. Mi parla in italiano, per favore ?』というと、驚いた様子でイタリア語で話してくれた。

彼女は日本が大好きで、特に日本の美術にかなり興味があったようで、私の知らないことまで知っていた。さすがイタリア人、話がはずむとガイドの仕事そっちのけで私と話していた。そんな出逢いもありながら、ドゥオーモ見学を終え、外にでた。

そろそろランチの店探し。事前に調べておいた伝統料理を食べられるレストランに行くことに。

地図を片手にシエナの街を散策。シエナは小さな路地や洞穴のような通路が入り乱れており、歩いているだけで冒険心を唆られる。

きっとこの街にもいろんな歴史があるのだろうと思いながらレストランに到着。

中を見ると混んでいる様子だった。カメリエーレに一人ですが席はありますか？と聞くと、『ごめんね。今満席で、いつ空くかわからないの』と言われ、ならば仕方がない他の店を探すかと、店を出て少し歩きだすと、向こうからさっきのカメリエーレが走ってきた。すると彼が、『たったいま予約のキャンセルがあったから、席が空いたんだ』と知らせに来てくれた。あまりのラッキーに驚いたが、このカメリエーレも『君はラッキーだね』と驚いていた。

注文したのは、シエナ産のサラミの盛り合わせとトスカーナ特産のパスタ、ピーチのラグーを注文。それと赤ワイン。まさにトスカーナといった力強い味わいで美味しかった。

ホールの人にお礼を言い、店を後にした。

さあどこに行こうか、ブラブラと歩きシエナの日常を楽しみながらカンポ広場に着いた。昼のカンポ広場も良かった。散策していると、急に大雨が降り出し、すぐにカンポ広場近くのバールで一服することに。アペリティーボをしながら雨のシエナを眺める。通り雨だったのか、すぐに雨は上がり青空が戻った。

また歩き出し、もう一度ドゥオーモの前にやって

きて、ベンチに腰掛けドゥオーモを眺めた。やはり立派。ここで明日からのプランを考えたり今日のディナーのレストランを探したりした。

そしてディナーのレストランに向かってブラブラと歩いていると、どこからともなく私を呼ぶ声が。

『Hey! Giapponese! Come stai !? 』

誰かと思うと、昨日ピザ屋で出会った男の人だった！またも偶然！驚き、会話が弾む！

明日はボローニャへ行くというと、ボローニャの美味しい食べ物や美味しいワインを教えてくれ、必ず日本で会おうと、かたい握手をした。

さて、ディナーのレストランに到着。

注文したのはもちろんキャンティのフルボトル。そしてキアニーナ牛のステーキに生のポルチーニを合わせるという贅沢極まりない皿。この店のシェフは女性の方で、オススメは？と聞くと、今日は生のポルチーニがある！と勧めてくれたのである。

ここで少しポルチーニのご説明を。

日本でも有名なポルチーニ、もちろんイタリアではよく食べられるが、冷凍・乾燥・生と、主に3つのタイプがある。私が働いていたレストランでは冷凍をよく使っていた。冷凍は保存がきき、解凍した時に出てくる汁が旨味をたっぷり含んでおり、この汁もいろいろと使い道がある。そして食感も柔らかく美味しい。乾燥は保存がきき、水で戻した時は冷凍と同じく汁を使えるが、食感が少し固く個人的には好まない。

そして、一番美味しく香りも最高なのが生のポルチーニである。イタリアでもそこそこの値段がする。日本で生のポルチーニを手に入れるのは難しいが、冷凍なら手に入りやすいので、ぜひ食べてみていただきたい。ことにプチトマトと合わせると絶品である。中国産のものも安く出回っているが、かなり味が落ちるので、できればイタリア産を。ルーマニア産も美味しい。

さて、そんな贅沢なポルチーニとお肉を食べ、赤ワインを楽しんだ。ガツンとくる最高の晩餐だった。

【ポルチーニとキアニーナ】

お腹も心も満タンになり、ほろ酔い気分で大好きなカンポ広場へ。シエナも今日で終わり、明日はいよいよボローニャへ向かう日だ。このカンポ広場とドゥオーモは忘れることは決してないだろう。

さあ、ボローニャではどんな出逢いが待っているのだろう。期待を胸にホテルに戻った。

（当館元留学生）

～レストランご紹介～

京都下鴨　ダイニングぼてちん

今月のコレンテにご寄稿頂いた岡本さんがおつとめの、京都下鴨にある洋食店です。引き続き今月も特典ご提供頂きましたので、ぜひご利用下さい。名物のタンシチューがおすすめです。

住所：京都市左京区下鴨西本町 21-1-101
アクセス：京都市バス・京都バス「府立大学前」
　　下車　目の前
Tel：075-781-0028
HP: https://www.botechin.com

特典：ぼてちんのチラシか今月号のコレンテを提示していただくとアイスクリーム1つサービス
（特典期間：2020 年 6 月末まで）

ルネサンスにきらめいた天才、

ラファエッロをおもう

深草　真由子

「イタリア・ルネサンス──宮廷と都市の文化展」が東京上野の国立西洋美術館で開催されたのは、もうずいぶん昔に感じる、2001年春のことだ。そのころの私にとって、イタリアは手の届かないあこがれの国。はるばる日本にやってきた珍しい物品を、こんな貴重な機会をのがしてなるかと、一つ一つじっくり時間をかけて見てまわったことを思い出す。

【《ラ・ヴェラータ》1516年頃、パラティーナ美術館】
出典：https://it.wikipedia.org/wiki/La_Velata

そのときに買って大切に残していた展覧会の分厚いカタログをとりだしてきて、展示作品の写真を眺めているときに、《ラ・ヴェラータ》が載っているのに気がついた。「あれ、これも来てたんだっけ」。ラファエッロのこの作品は、イタリアに住む日本人の友だちのお気に入りで、ああ、これを見に、フィレンツェに行きたいなあ、と言うのをよく聞いていたので、私もどんなものであるかは一応知っていたのだけれど、自分が東京で見た記憶は、情けないことにまったくなかったのだ。

ラファエッロといえば聖母。聖母といえば、その衣服のあざやかな赤と青。キリストの死と教会を象徴するその二色の絶妙なコンビネーションこそがラファエッロなのだ、と私は長いあいだ思っていた（《ベルヴェデーレの聖母》などを思い浮かべてもらいたい）。マドンナでもなく、色合いも比較的地味な《ラ・ヴェラータ》が、東京でそれを見た私に特別な印象を残さなかったのは、そんな思い込みのせいだったのかもしれない。実際は、女の服の（なぜだかひどくゴワゴワしている）そでの部分に明るい金色が使われていて、それが良いアクセントになっているし、地味というより、統一感があって落ちついている、と言うべきなのだろう。よく見ると、胸元を透けてみせる白いブラウスのしわしわ感といい、一つ一つ色が異なるネックレスの石の立体感といい、じつに見事である。そしてなにより、きゅっと閉じられた小さな口やほんのり赤い頬、見つめられて照れているような、どこか恥ずかしそうな表情のなんて優美なこと。

その展覧会は、ブルネッレスキからティツィアーノまで、ルネサンスの芸術家が勢ぞろいしたと言ってもよい、たいへん豪華なものであったが、そのカタログに掲載されている論考のなかには、《ラ・ヴェラータ》一点のみが出展されたラファエッロに焦点をあてたものがあった（26～28ページ）。「ラファエッロの栄光」というタイトルの、高階秀爾先生によるその文章を読んで、なるほど、とうなずいた。やはり、ラファエッロは唯一無二の存在なのだ。「レオナルドやミケランジェロが偉大な芸術家であり、また驚嘆すべきデッサン家であったことは論をまたないが、彼らの名前はあまりにも強くその独自の個性と結びついている。それに対しラファエッロの名前は、37年のその生涯ばかりでなく、西欧美術400年の伝統をも思い出させる。それは、固有名詞というよりはほとんど普通名詞に近いとさえ言えるであろう」。ラファエッロはルネサンス期に確立した古典主義芸術の体現者であり、のちの時代のアカデミーがよりどころにした美

学そのものであった。ゆえに模範として仰がれもすれば、権威として反発されもした、ということである。

ラファエッロ・サンツィオは1483年4月6日、ウルビーノに生まれた。宮廷画家だった父を11歳で亡くし、引き継いだ工房の仕事をりっぱにこなすと、16歳のときに、イタリア最高の画家と評されていたペルジーノに弟子入りし、彼のもとで絵画の基礎を学んだ。

それからラファエッロは、レオナルド・ダ・ヴィンチとミケランジェロがしのぎを削るフィレンツェに移った。ラファエッロはとりわけレオナルドをよく研究した。その成果は、先に言及した《ベルヴェデーレの聖母》などに見てとることができる。

【《ベルヴェデーレの聖母》1506 年、美術史美術館】
出典：https://it.wikipedia.org/wiki/Madonna_del_Belvedere

ペルージャ、フィレンツェで成功をおさめたラファエッロが真の栄光を手にするのはローマにおいてである。教皇ユリウス二世にまねかれ、そのアパートメントの壁にフレスコ画を制作することになったのだ。現在署名の間とよばれている部屋がその一つで、ラファエッロはそこに、神学、哲学、詩、法をたたえる《聖体の論議》《アテネの学堂》《パルナッソス》《枢要徳》を描いた。それとおなじ時期にシスティーナ礼拝堂の天井画にとりくんでいたミケランジェロが、人をよせつけない孤高の人だったのと対照的に、ラファエッロは朗らかな性格で、いつもたくさんの弟子に囲まれ、枢機卿や人文主義者を友人とした。衒いのない、洗練されたふるまい方を心得る、りっぱな宮廷人であった。

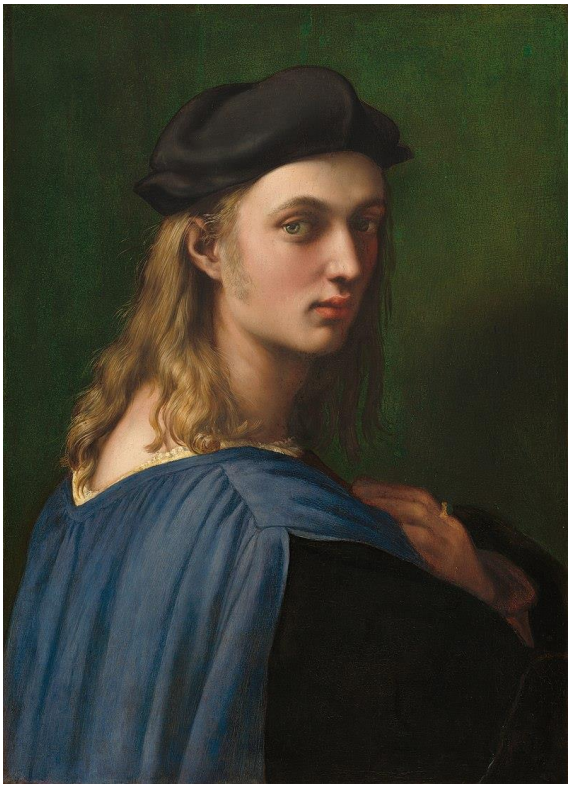
亡くなったブラマンテを引き継いでサン・ピエトロ大聖堂の建設を指揮するなど、芸術家として華々しく活躍していた1520年、ラファエッロは突然世を去った。生まれたときとおなじ4月6日、復活祭を前にした聖金曜日のことで、ジョルジョ・ヴァザーリの伝えるところによれば、「情事におぼれる日々をすごしているうちに、ある時、いつにもましてやり過ぎて(continuando fuor di modo i piaceri amorosi, avvenne ch'una volta fra l'altre disordinò più del solito, *Le Vite*)」、ひどく高い熱を出してしまったそうである。37年の短い人生であった。

さて、その高熱の原因であったかもしれない、画家の最愛の女性、有名な《ラ・フォルナリーナ》とならんで、私が今もっとも心ひかれているラファエッロ作品は、《ビンド・アルトヴィーティの肖像》である。ラファエッロは生前から、肖像画家としてもたいへん高く評価されていた。先の高階先生の論考にも、「内面の高貴さ、大らかさ、豊かさはポーズ、表情、身振り、衣裳などの外部に表われるから、画家は適確にそれを読み取って表現しなければならない。ラファエッロは、その優れた技量に加えて、人間に対する豊かな洞察力にも恵まれており、それが彼の作品、特に肖像画において卓越した成果を生み出すことになった」とある。ラファエッロは対象の姿かたちだけではなく、その「魂」をも描いてみせることができたというのである。

ラファエッロがその肖像画を描いたビンド・アルトヴィーティ(1491年～1557年)は、メディチの覇権をのがれてフィレンツェからローマに活動拠点を移した、裕福な銀行家の息子として生まれた。16歳で父を亡くして莫大な財産を相続すると、ローマ教皇庁の金融業務にたずさわるなどして、その富をさらに大きくふくらませることに成功し、やがて、フッガー家やヴェルザー家などと競うほどの有力者になった。またビンドは生涯にわたり、

熱心な共和制支持者でもあった。祖国フィレンツェをメディチ家の支配から解放するために力をつくしたが、その夢は、フィレンツェ公コジモ一世によって打ち砕かれた。

肖像画のなかの彼は、そんな人生の成功も挫折もまだなにも知らない24歳。政敵メディチ家出身の教皇レオ十世が君臨し、ライバルの銀行家アゴスティーノ・キージが繁栄を誇るローマで、大きな野心を胸に秘め、機が熟すのをじっと待っていたのではないだろうか。背中をみせたままこちらを向く、この若い男の澄んだ瞳の奥に、ラファエッロはいったいなにを読みとっていたのだろう。ワシントンのナショナル・ギャラリーにあるこの絵が、いつか海を渡ってやってくることがあれば、ぜひとも足を運んで、ビンド・アルトヴィーティの「魂」に触れてみたいと思っている。



【《ビンド・アルトヴィーティの肖像》1515年頃、ナショナル・ギャラリー】

出典：https://it.wikipedia.org/wiki/Ritratto_di_Bindo_Altoviti

＜参考文献＞

「イタリア・ルネサンス――宮廷と都市の文化展」、高梨光正（日本語版カタログ責任編集）、日本経済新聞社、2001年

【後記】

ラファエッロの死から500年目の記念の年にあたる2020年は、ラファエッロの人生と作品をふりかえる展覧会がローマで企画されていましたが、予定されていた開催時期のほとんどは、新型コロナウイルス感染症の流行によるロックダウンの期間と重なってしまいました。そのため、展覧会の内容を伝える動画や関連する情報が、Squderie del Quirinale のチャンネルで公開されています。

https://www.youtube.com/channel/UCw9HQLDh6-rm_xtk8HMmOwA

（元当館スタッフ）

～会館だより～

イタリア語 無料体験レッスン

7月より開講の夏期イタリア語講座に向けて、体験レッスンを開催します。 入門者向け。事前予約制。

●京都本校：日本イタリア会館
7/2（木）11:00～12:30
7/4（土）11:00～12:30

● 四条烏丸：ウイングス京都
6/29（月）19:00～20:30

●大阪梅田校：大阪駅前第4ビル
7/2（木）19:00～20:30

イタリア語 無料カウンセリング

学習経験者向け。事前予約制。

●京都本校：日本イタリア会館
7/4（土）14:00～ （各人30分ほど）

スペイン語 無料体験レッスン

入門者向け。事前予約制。

●京都本校：日本イタリア会館
6/30（火）19:00～20:30

編集・発行 /（公財） 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4
TEL：(075)761-4356/FAX：(075)761-4357
E-mail： centro@italiakaikan.jp
URL： http://italiakaikan.jp/